



3・17 追悼！塩見孝也とその時代



1941年5月22日生誕(大阪十三) 62年京都大学文学部入学 64年京都府学連第21回大会書記長 65年共産同統一委員会結成大会政治局員 65年社学同再建全国大会副委員長 66年共産同再建第6回大会政治局員(学対部長) 67年第7回大会政治局員 68年第8回大会政治局員(東京都委員会) 69年共産同赤軍派結成(議長) 70年逮捕(獄中約20年) 74年共産同赤軍派(プロ革)結成 79年日本社会科学研究所(マルクス・レーニン主義、毛沢東思想)結成 89年出獄 96年自主日本の会(ぱとり) 15年塩見孝也と銀河の会
2017年11月14日死去(享年76歳)

塩見孝也著作リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (2018年5月10日)

- 「政治闘争、社会政治闘争—第三期学生運動論」(65年『戦士』NO6) ●「転換期の意義と我々の任務とは何か—第2期生協は何処へ行く 第3期生協運動試論」(65年P) ●「ゲバラ=カストロ路線と我々」(67年『烽火』NO5) ●「我々の世界革命戦略と組織論について—現代プロレタリア革命の立場」(68年『解放』共産同中大細胞機関誌1号) ●「我々の緊急の任務=世界党建設に向けて」(68年『烽火』NO7) ●「我々の立脚すべき地点」(69年『赤軍』NO1) ●「赤軍派同志への私の自己批判」(69年阪本 均『赤軍』NO2) ●「同盟への我々の自己批判」(69年『赤軍』NO8) ●「スターリン主義と四中委議案」(69年『赤軍』NO8) ●「獄中からの決意表明」(70年『F-01』) ●「獄中アピール」(70年『F-01』) ●「日本—世界社会主義革命戦争の新たな地平を切り拓け—HJ公判への所信表明」(70年『F-02』) ●「所信表明」(72年『査証』NO2) ●「今回の問題について」(72年『査証』NO3) ●「同盟第三次転換とプロレタリア=共産主義思想・反米反帝の人民民主主義革命の路線とプロレタリア革命党の建設に向けて」(72年P) ●「革命戦争派の綱領問題」(72年『序章』7号) ●「川島・渡辺両氏の公開質問にこたえる」(73年『序章』12号) ●「日共(革左)川島・渡辺両氏を再批判する(上)」(73年『序章』14号) ●「連赤敗北の総括の第二段階と我々の民々革命論の検討」(72年『査証』NO7) ●「連赤敗北における山岳根拠地路線の意義の明確化」(73年『新左翼』163~9号) ●『塩見孝也論叢』1~8(72~74年) ●「第一次綱領草案」(74年『赤軍』再刊準備1号『論叢』9) ●『過渡期社会論』(75年酒井隆樹共著『赤軍』再刊準備2号 編査証出版) ●「反帝反社帝世界革命戦争の一大前進=中国継続革命=根拠地化・インドシナ革命戦争の勝利に、プロレタリア単一党建設—建軍・攻撃的蜂起の前進でこたえよ」(75年『情況』9月号) ●『一向過渡期世界論の防衛と発展のために』(75年査証出版) ●『マルクス主義』1・2(日本社会科学研究所(マルクス・レーニン主義 毛沢東思

想 79 年) ●『風雪』復刊 1 号～56 号(82～92 年塩見孝也救援会) ●『封建社会主義と現代-塩見孝也獄中論文集』(88 年塩見孝也救援会, 新泉社) ●『いま語っておくべきこと 現代資本主義論と社会主義論 革命的左翼運動の総括』(90 年川島豪対談 新泉社) ●『春雷』創刊号～?(96 年自主日本の会) ●『「リハビリ」終了宣言-元赤軍派議長の獄中二十年とその後の六年半』(96 年紫翠会出版) ●『さらば赤軍派 私の幸福論』(02 年オークラ出版) ●『赤軍派始末記 元議長が語る 40 年』(03 年彩流社) ●『監獄記-厳正独房から日本を変えようとした、獄中 20 年』(04 年オークラ出版) ●『革命バカ一代 駐車場日記-たかが駐車場、されど駐車場』(14 年鹿砦社)



①新開純也(59 年京大入学、元共産同) 開会挨拶



「黙祷！……」

塩見君は、1962年京都大学入学です。

60年安保闘争が終わって余燼がくすぶる時に入学してきました。

62年は大学管理法案反対闘争(大管法闘争)の年でありまして、これが60年安保闘争以来の大きな盛り上がりを示した。とりわけ、京都府学連等の関西の学生運動は全国の運動をリードするぐらいの盛り上がりを示しました。その時に彼は、入学してきました。僕のイメージとしては、このキャンパスを闊歩すると言う感じで、最初から目立った男でありました。

そして、その運動の中で共産主義者同盟に入り、その後京都府学連の書記長になりました。当時の京都府学連委員長は、高瀬泰司(59年入学)でありました。彼はその下で書記長をやっていました。

しかし、関西の運動だけではと、関西の宿命と言う事もあって、中央に出て行かなければならない。東京で、全学連再建とブント再建、これを両方からみ合わせて、東京に出て行こうと成りました。

東京への進出は、僕が理解する限りは二回ありました。

最初は、僕などが中心になって、同志社大学の田中正治(60年入学)、大阪市大の旭凡太郎(60年入学)等々が中心になって東京進出、全学連再建をやらうとしました。63～65年頃です。

ただ、それは革共同中核派、社青同解放派もありましたが、他方フロント等構造改革派も日本共産党を離党してありました。この事を踏まえた言わば「合従連衡」的意味での、全学連再建であったわけです。

その後、塩見、高原浩之(62年入学)君等々と言う、後に赤軍派世代というメンバーが本格的に全学連

再建とブント再建をやろうと言うことで、第二波の上京と言う事になりました。

そこが決定的に違う所は、我々の時はまだ「合従連衡」的な活動でしたが、しかし塩見君達の世代は、東京に拠点を創り、その拠点を背景にして全学連再建と第二次ブント再建をやろうと言う事で、そこが大きな違いだと思います。

早稲田大学に塩見君が張り付いて、村田能則、荒岱介をオルグする。高原君などが明治大学に就いて、拠点化する。この事を背景に、1966年革共同中核派、社青同解放派等と三派全学連を再建し、いわゆる第二次ブントが再建されました。この過程を、塩見君は、次の世代を率いて担った事は、彼の大きな実績だと思っています。僕は今でも、この事を大きく評価しております。

「関西ブント」と言うのは、色んな軌跡はありましたが、後知恵ですが論理立てて出来ていました。

60年安保闘争の総括として「政治過程論」(1961年全学連第17回大会対案・京都府学連)があって、次に「第三期論」(1964年「第三の転換点」と我々の課題」『戦士』NO5)があって、それから塩見君達を中心になって提起しました「過渡期世界論」(1968年「我々の緊急の任務＝世界党建設に向けて」(『烽火』NO7)があって、その後「資本主義批判」「共産主義論」(『共産主義』14・15号)。

こう言う流れになっている訳です。

「政治過程論」で60安保闘争を肯定的に総括する、しかし、あれを超える為にどうしたら良いかと「第三期論」が出てきました。この二つの理論が持っている一国性みたいな事が、当時のベトナム反戦闘争を中心にした世界的な階級闘争の中で「過渡期世界論」に行く。そう言う運動になると将来的にそれを支える政治勢力、あるいはその後創られるべき社会とは何かになりますから、資本主義批判・共産主義論になった事は、今から後知恵的に考えると四つの理論、関西ブントの持っていた理論的構成はいわば必然的な流れではなかったかと、今でも思っております。

最後になりますが、塩見君は僕にとって良い男でありました。そして、彼の革命魂はずっと死ぬまで続いていたと思います。又彼は、いろんな方に迷惑をかけた事もありましたが、彼の革命に対する情熱は変わらなかったと思います。ある意味、自分のわがままを通して、幸せな一生であったと思います。..」

②物江克男 (66年滋賀大学入学、元共産同赤軍派)



追悼—塩見さんとその時代開催にあたって

この会を開催するにあたり、色々な方に連絡をとりました。

勿論、かつて、赤軍派に所属して、闘った同志たちに出席をお願いしましたが、出席するしないにかかわらず、ほとんどの方から、極めて複雑な反応が返ってきました。

かつての闘いから、既に、50年近い年月が経過しているのにもかかわらず、色々な想いが錯綜しているのが見えます。特に、極めて困難な局面を担った人たち—ハイジャック後のM作戦から革命左派との連携の時期を担った人たちの言葉は重たいものを感じさせました。M作戦を実行し、重刑を受け、社会に戻った時には組織はなかったのですから。

何人かの人からは、この機会に、連合赤軍の同志殺しについて、一緒に闘ってきた仲間として、その全体を共有したいとの強い想いも伝えられました。連合赤軍の同志殺しの責任を「赤軍派」として引き受けようということです。

東京の集会で、高原さんが、自らも含めた指導部の責任という表明をされたことに触発されたことと、このことを「事件」として扱う人たちが跋扈していることへの強い反発です。

その全体を共有するという営為を続けることには、森さんに体现される路線もその功罪併せ、背負うこと

が含まれます。「自分の正しさ一立場の主張」という形で、責任を回避することなく、塩見さんも共に「責」を負っていただくことを意味します。

塩見さんの基本主張は周知のように「過渡期世界論」にあります。そして、赤軍派は過渡期世界論を主導理論として闘いました。過渡期世界論は、68年国際反戦集会で8.3論文として登場し、さらに赤軍N04まで、変遷を遂げています。

この過渡期世界論には2つの側面があります。それは、当時の世界革命の情勢を「3ブロック階級闘争とその結合」として叙述するのみならず、この階級闘争を領導する主体を措定したことです。

いわゆる攻撃型階級闘争の時代を領導するのは「党—軍」であり、この「軍」による闘いが、目的意識性をつくっていくという構造です。

この構造を実践できるのが、この時代の革命家になります。前段階武装蜂起も闘いの規模は大きく、権力の一時的解体を目指しますが、構造は一緒です。国際根拠地は、この軍の再生産の場所として考えられます。

「党—軍」が領導し、人民に目的意識を注入していくという構図は、時代の認識の在り方として、当時のブンドの活動家に飛躍を要求しました。この基本構造は赤軍派においては通底奏音として最後まで貫徹します。逆にこの構造を基本認識とする人が赤軍派だったと思います。

10.8以降の実力闘争に壁を感じ、全共闘に限界を感じていた人たちは、赤軍派に期待します。ゲバラの「ローマの剣闘士と観客」の関係であってはならないという言葉が席卷する雰囲気があり、京都ではパルチザンが登場していました。

しかし、現実の赤軍派の出発は悲劇的でした。7.6事件が歴史の始まりでした。共に闘い、共に69年秋の闘いを目指していた仲間を裏切ることからの出発になったのです。そして、それはブンドを解体する契機になります。赤軍派も塩見さんを頂点とする純化した集団になり、自らを批判的に検証する意識性の水準を喪失します。

現実の闘いも困難を極めました。東京戦争、大阪戦争と失敗し、乾坤一擲の「大菩薩の闘い」も、事前検挙され敗北します。この間、100名を超える経験ある活動家が逮捕されます。

ハイジャック闘争は主に東大安田講堂組で担われ、闘争としては、成功するものの、国際根拠地建設にはほど遠く、逆に、主張してきた「国際根拠地」論の内実が問われます。後年、パレスチナの闘いのなかで、「革命後国家」より、現実には帝国主義と闘っている地域と運動こそ根拠地足り得ることを学ぶことになったのです。

弾圧は厳しくなり、塩見さんはじめ創立時の指導部は逮捕されたり、闘いから距離をもったりします。この非常に困難な時期に森さんがリーダーになり、M作戦に突入します。兵站も枯れ、作戦そのものが兵站化する状況もあったようです。この時のメンバーは銀行強盗のような「革命の正当性」も疑問になるような作戦のなかで、よく闘いました。各部隊の責任者はふるくからの活動家が多く(4.28組が主力です)、メンバーには赤軍派に期待を持って参加した者が多く、よくこの困難を背負いました。「党—軍」を維持し、小さくとも正面線を試みようとしたのです。

この困難のなかで、革命左派との接触が始まったようです。それは、「生き延びていくこと」と「銃への欲求」であったかもしれませんが。接触から、連携へと進みますが、連携が深まるころは、M作戦を担ったふるくからの同志はほぼ壊滅的に逮捕された状況にみえます。このことも、その後の展開を大きく左右したはずです。

所有する武器の質は集団の意識を変えます。連合赤軍の「銃による共産主義」はまさしく「銃をもつことによる、銃に支配された意識の変化」を表現しています。先に銃を所有した革命左派は先行して、同志の処

刑に踏み切っています。坂東君は、「銃を持ってから、逃亡者が増えた」とも書いています。そして、両組織の合同のまさにその瞬間に全ての悲劇は起こったのです。今から思えば、「銃」を持つに足る、「革命の正当性」も「組織としての豊かさ」も、その水準にないことはわかります。「共産主義」という言葉の虚しさが響きます。

この革命左派との連合という最終局面を担った森さん、山田さんはいずれも一度自ら退却を選んでいきます。彼らが、赤軍派に復帰する時の「何か」が何であったか、そして、この局面でどう作用したかはもう聞くことはできません。それは、困難を困難と言えなかった、一歩後退と退却を言えなかった「土壌」と関連しているのかもしれませんが。

「党—軍」を主導として、局面を開き、民衆に目的意識を与えていく路線は、60年代後半の権力との闘いを前面で闘ってきましたが、ここに敗北します。7. 6事件で始まり、連赤の同志虐殺で終わる全過程が赤軍派の闘いです。よく闘いましたが、致命的な誤りも犯しています。

まず、7. 6、連赤での同志殺し、という内部暴力の犠牲者には明確に謝罪することだと思えます。個人の問題や資質にすることを拒否して。既に長い年月が経っていますが、この塩見さんの追悼と時代を語る場こそ、ふさわしいかもしれません。この「全過程」を振り返ると、M作戦以降は明らかに「後退戦」です。この「後退戦」こそ私たちが責任をとらなければならない。この「後退戦」で起きたことにこそ責任をとる。それが人民に信頼される最低限の証なのではないでしょうか。終生、赤軍派議長を名乗った塩見さんの追悼の場だからこそ、話し合ってみたかったのです。

68年を頂点とする60年代後半の世界革命の波のなかで、米国で、フランスで、ドイツで、イタリアで広範に国家権力直接対決する闘いが展開され、多くが、武装闘争にまで到達し、そして敗北しました。

イタリアでは、日本より広範に、かつ深く、かつ持続的に闘われました。イタリアの指導者が拳銃をもち、大衆が歓呼で応えるシーンを見たことがあります。またそこには明るさがみられます。

各国の闘いもまた、色々な総括と課題を残しています。この世界的な同質性、同時性こそ、間違いなく世界が到達した地平であり、日本でも赤軍派が登場しえた「根拠」です。そして、次の世界革命の波ではさらに緊密な闘いが予測されます。

塩見さんとは鮮烈な思い出があります。7. 6後、中大から逃走する時、顔面血だらけの望月さんを背負って、体中血だらけになりながら、逃げるタクシーを必死で止める鬼の形相をした塩見さんです。

その時、武装闘争というのはこういうことから始まるんだ、と実感した記憶です。

「大菩薩」の時も、塩見さんを如何に海外に逃がすかがひとつの課題でした。ハイジャックも本来は塩見さんを根拠地に運ぶことでした。PBM作戦のPは塩見さんの奪還でした。赤軍派に塩見さんは特別な「存在」でした。

しかし、残念なことに、塩見さんは、自ら「これが国際根拠地だ」と語った、日本赤軍のパレスチナでの闘いには合流できませんでした。金日成の主体思想を高く評価し、熱い抱擁を交わした「ピョンヤンの同志」との良好な関係も続かなかったようです。「何故なのか」。塩見さんの個人的な問題だったのでしょうか。古希を迎えるなかで、それぞれ、現場を持って闘っています。一人ひとりが総括を抱えて、現場の闘いのなかで少しでも生かそうとしています。厳しい闘いを経験したからこそ、その体験を現場で伝えていこうとしています。「苦悩」に結論がでないからこそ現場に入り続けています。「苦悩」に結論がでないからこそ、もう一度現場でやる。電話や手紙の声はそうでした。塩見さんらしい送り方になればよいとおもいます

③海藤壽夫（62年京大入学、塩見孝也同期生、弁護士）

「…今日は重い話が多いと思いますが、僕は違った形で塩見との付き合いを語りたいと思います。塩見君は62年入学ですが、私も同じ同学年です。私は学生運動組織に入った事はありません。関わったのは、生活協同組合組織部に入った時から、清田祐一郎(59年入学)さん等様々な方々と関係が出来ました。私は、二年生(63年)になった時生協組織部議長になり、学生常任理事になりました。その時に、塩見孝也も一つは生活資金を稼ぐと言う意味もあったのですが、学生常任理事になりました。二人で、生協の理事会に参加したのです。月二回ぐらいはあったと思いますし、その時に時計台地下にありました、生協書籍部を日本共産党の破壊活動から防衛する為、一年間封鎖した事もあります。そう言う学生常任理事としての付き合いを彼としました。僕にとっては塩見と言うのは、「こう言う人間もおるのか？」と言う驚愕の時間をもらいました。

理事会の中で、助教授三名が大学側として出席していましたが、僕は少なくとも敬意を持って三人の先生方とは話していましたが、彼は「お前らは…」と言う感じです。僕にとっては文化的ショックでした。塩見のような者が、まさに「革命家」になるんだなと思いました。

世界革命と言うのが彼の欲望ですから、その欲望に対して、自分の欲望などは小さなものと言う事でしょう。その後、オルグをされた事もありますが、そこはお断りして私は実務家的人間として生きて行く事を、塩見と対峙する中で、僕自身は決めて行きました。

64年6月の選挙で、社学同は共産党・民青に全面敗北しまして、同学会のヘゲモニーも失う。それと同様に、生協組織部のヘゲモニーも失いました。さて、どうした良いか？となりました。その時に、生協組織部の二年下に、僕が採用した山田 孝(64年入学)がおりました。彼は、革命家の道を選ぶとして、そこから本格的に東京に出て行きました。

僕自身は、法学部学生である事を思い出し、勉強を再開して司法試験を通り弁護士になりました。塩見が下獄し出て来た後は、親友であり、二年年上ですので兄のように慕い、何かと連絡し、話会いました。僕にとって塩見は、出て来た後も様々と活動していましたが、シーラカンス、生きる化石、博物館の人間だと思っていました。そう言う塩見が、僕にとって現実性を持って来たのが、清瀬市の駐車場の管理者になった事です。これによって、彼が生きている人間、労働する人間との具体的接点が生まれました。その結果として、清瀬市の市議会選挙に出ました。落選しましたが、そう言うチャレンジをした事も、彼が市民社会の中で生きて行く事を選択した事を、僕自身は評価しました。

彼は二回の心臓バイパス手術も受けており、その後体調を崩して行きます。昨年二回、入院先に面会に行きました。その時『ミル・マルクス・現代』(武田信照・56年大阪市大入学)を送り、その話をしました。彼は、高校生の時ジョン・スチュアート・ミルの『自由論』を原文で読んでいたとも聞き、彼の原点を聞く思いをしました。

そこで出て来たいろんな話の中で、彼は自分たちが様々にやって来た事を、世界史的に、人類史的に位置づけるとどうなのかを考えていました。そこで、良かったと100点の点数をつける事は出来ないが、そう言う問題意識を持ち始めていたと言う事です。

塩見は、生きるだけ立派に生きました。そして心臓が自宅に居る時に止まり、奥さんの前で死んだと言う事。奥さんも、塩見の死に方を立派な死に方だと述べていました。

まさに彼は、生き切った。素晴らしい人生だと思います。

④小西隆裕（×年東大入学 ピョンヤン かりの会）～代読・金子恵美子



塩見追悼文（メッセージ）

塩見さん、そちらの様子はどうですか。この世におられた時、こうして安否を問えていたらと思いますが、それがどうしてもできませんでした。

あれから50年、今、あの時にも増して大きな激動の時を迎えつつありますよ。

あの時、そう、ベトナム戦争の時でしたね。あの戦争を中心に世界中が闘いに沸き立ち、日本も立ち上がり、米国の牙城を揺るがせましたね。

「世界同時革命」のスローガンがごく自然にわれわれの口を突いて出たものです。

そして今、米国の牙城は、あの時にも増してガタガタですよ。その上に今度、朝鮮半島をめぐる激震が起こりました。

それが「北」の脅威を口実とする安倍政権の「改憲」「新防衛大綱」策動の根拠を掘り崩し、朝鮮半島を狙う沖縄米軍基地反対の闘いと共鳴し、さらに日本政界に今起こりつつある米国離れの巨大な地殻変動を大きく促進して行くことになれば、面白いですね。

今こそ、米国の牙城を最終的に突き崩し、脱米脱覇権の新しい日本を生み出して行く大激動の始まりなのではないでしょうか。

塩見さん、私たちは、ここ朝鮮の地からこの闘いに参加して行きます。

塩見さんも、そちらから力を貸して下さい。安らかな眠りは、その後で十分ですよ。

どうかよろしくお願いします。

⑤足立正生（59年日大入学、元日本赤軍、映画監督）



「私自身、日本赤軍を改めて結成する際までは、60年安保闘争後、66年三派全学連が創られて行く過程までは密接に学生運動に関わっていましたが、その後は別の活動をしようと離れていました。

ですから、7・6後出来た赤軍派との関係は直接ありません。塩見孝也とも直接は関係が無いと言う事です。私がここで発言するのは、すこし場違いと思っています。

ただし、日本では最終的に1972年連合赤軍の同志殺し、浅間山荘銃撃戦と言うところで、一定の暴力革命路線の終焉に、権力によってさせられていったと

言う事があります。

それらの事を考えるならば、例えば東京の偲ぶ会にも参加しましたが、あまりにもヘッタレタ偲ぶ会で腹を立てていましたが、その中でも正当な事を総括的言われる人達もいました。

高原さん等が塩見が死んだのをきっかけに、赤軍派の総括をきっちりして次に進もうではないかの発言がありました。これは、ぜひ一緒にやらないと行けないなと思いました。

しかし、思い返してみると1974年に日本赤軍という組織を改めて創ろうとしたのは、連合赤軍の同志殺しを、自分たちがそこに居たならば、自分たちも同じ事をやったかも知れないと言う、何の違っても無い戦闘団主義にいたからです。

その同志殺しの問題を総括する事でしか、日本赤軍はスタートしないと決めたのです。

その時に、改めて日本の中にしっかりとした基盤が無い、根なし草なのですが、ではその事をどう捉えかえすかが問われました。唯物論、マルクス主義で言えば「世界を変える」、まず客観的に世界を批判する所からスタートするのですが、日本赤軍が捉え返したのは、暴力革命路線の敗北の地平からスタートす

れば、まず自分たちがそういう事をやって来たんだと言う事を基軸に、では自分たちをどう変えるか？自分たちを変えるための観念的では無い自己批判の思想と言うのを、結集軸にもう一回やり直そうとしました。

熱意で革命を行うのでは無く、その中にあるスターリン主義的なもの、あるいは偏向的なもの、それらを全て含めて、まず自分の確信を疑う所から開始しようと事が基本になりました。

その事を考えてみると、それでは赤軍派の総括をつける、みんな総括しながら現在まで生きて来たと思います。赤軍派、連合赤軍の総括と言うことでは、証言集を出している人々の非常に重要な作業もありますが、ああ言う事をやっていれば後5年、10年と永遠に総括をやり続けると言う事の訳ですね。

しかし、総括をする事は、敗北的事態を問いなおして、変えて、今の中で革命を勝つ為に実行する、あるいは具体的に運動展開して行く事を抜きに総括は進まないだろうと思っております。

ですから、私自身自己批判の思想を結集軸にした日本赤軍も、しかし、バタバタとみんな間違えて逮捕されてしまう。最後は、日本なんか絶対に帰ってはダメだと言っていた重信房子が、のんびり日本に帰っていて、泳がされて2000年に逮捕される。

一言で言えば、自己批判の思想から総括して出発しておりながら、言っている事と実行している事との乖離があった、ここにもう一度考え直さないと行けない問題があると考えています。

もう一度言えば、赤軍派の塩見、リーダーの塩見が創った赤軍派と言う単絡な考え方があるならば、それを変える所から赤軍派の総括を深めて欲しいと思います。同時に、遅れた日本赤軍は、自己批判の思想の結集軸を持ちながら、綱領的領域も総括しました。その文書は「人民革命党綱領草案」(1991年)として出ています。14~15年前です。これも、敵公安警察に文書が取られていたものです。

なぜ、こう言う話を最後にするかと言うと、まだ田宮高麿、塩見孝也さんが生きていた頃、それぞれの総括地平を突き合わせないかと、高沢皓司から「田宮、塩見さんは合意したから、アラブにいる貴方と三者で総括の突き合わせをしよう」との提案がありました。それは良い事と思いましたが、ただ、塩見さんを連れてアラブに来て、その塩見さんと会うことは、僕らが浮上してしまう事だから、慎重な方法はあるのかと提起しました。三者の総括は、持ち回りしか難しいと考えました。

又、私が帰国後、塩見さんが故大下敦史(『情況』編集長)を通して、総括を軸にした「綱領草案委員会」を創りたいとの提案がありました。日本赤軍の「人民革命党綱領草案」もあるので、それを提起した所、新たな所からやりたいとの返事で、これも成立しませんでした。

私自身も、総括の深化を今後の革命の糧になるように考えて行きたいと思います。以上」

⑥三浦俊一(66年関東学院大学入学、元共産同赤軍派、釜日労副委員長)



「……私は、66年秋に社学同に入り、68年初頭にブントに入党し、68年1月の原子力空母エンタープラス寄港阻止闘争で逮捕され、出獄したらマルクス主義戦線派として放逐されました。

これが第一回目のブント内での経験です。6か月間悩みに悩んでブントに復帰しました。オルグされたのは日向 翔(荒 岳介)さんでした。そのわずか数カ月後、今度は7・6です。2年の間、二回も党内闘争で放逐されたりで、結果的にブントは何なんだと考えました。その一つの私の帰結は、ここに多く参加されている関西の皆さんに、東京から釜ヶ崎に来た時に、随分ネチネチと言いつけました。

関西ブントと言うのは、本当にいい加減だと。東京に来て引っかきまわして、多くの社学同の若い仲間を離散させ、そして70年安保闘争に向けての準備を壊したのは、関西ブントではないかと。そう言う話をし

ていましたが、どういう訳か私自身が赤軍派に行ってしまう。行きたくて行ったんじゃ無かったので

す。
私が居った関東学院大学のバリケードに、7・6が終わった後、赤軍派の30人、40人の部隊が入って来て

てします。どうやって追い出すか相談しましたが、これはとても勝てない。
私も、ブント神奈川県委員会、左派フラグにいましたので、赤軍派の内容は理解できまし、赤軍派の論議

が全て聞こえてきました。
「秋の蜂起はどうするのか？」「さらぎ徳二さんをリンチした事に対する自己批判をどうするか？」..
こんな話がみんな入って来まして、赤軍派とはすごく明るい組織だと思いながら、こんな明るい組織にブ

ントが壊された事にも怒りも持ちました。しかし、これは一つの契機、逆説的な契機でした。
その後様々ありましたが、69年大菩薩峠には行きませんでした。理由は、ブントの神奈川県地区の拠

点は、関東医学院大学しかなかったからです。横浜国立大は革共同中核派、神奈川大は社青同解放派、
そして関東学院大学はブントで固めると言う方針があったからです。
話を簡潔にします。赤軍派として総括をする事は結構な事です。しかし、私は赤軍派としての全体の総括

を待てませんし、待ちません。
今、十分にしなければならぬ事があるからです。沖縄闘争は、改憲阻止の闘いはどうするのか、反貧困
の闘いはどうするのか。今ある課題にしっかりと答えて行く事が、私は自分の赤軍派の総括だと思います。
生き方として総括をする、これが私の総括です。そして、かつて共に闘い、又倒れていった者の全ての意
思を、自分の志で引受ける、覚悟を決めて引き受ける。そして、闘い切れなかったとしても、臆病者と言
われる誹りを一切恐れずに闘って行きたいと思ひます。

第2部～司会・戸梶博夫（62年大阪市大入学、元共産同）・・・・・・・・・・・・・・・・

①柳田 健（56年大阪市大入学、元共産同）・・



献杯の辞

塩見孝也君について

塩見孝也君は、「過渡期世界論」をひっさげて一世を風靡した革命家です。
7・6で、東京を追われた田宮高磨が大阪に来てわたしのもとにやってきた。
自分をブントにオルグしたのは柳田さんだからその責任をとって赤軍派に来て
くださいと言った。
その田宮が心酔したのが塩見でした。大阪戦旗社で新開がどうなんだと聞くと、
「僕は塩見についていく」ときっぱりといいきました。

獄中 18 年の後、朝鮮を訪れた塩見と田宮はしっかりと抱きあいました。
赤軍派が結成されたが。しかし赤軍派は「大菩薩峠」で権力に敗北し、彼自身は獄中 18 年を余儀なくさ
れます。

これは日本の革命史上、「3.15 事件」を書いて権力に虐殺された小林多喜二、獄中 20 年を強いられた日
本共産党の徳田球一、志賀義雄に次ぐものです。

私は彼の理論に必ずしも同調するものではありませんが、彼の革命のために戦う姿勢、それを知るが故
に権力に弾圧された彼の姿勢に敬意を表するものであります。

彼の眠りの安らかならんことを祈ります。

⑧高瀬照美（59年京大入学高瀬泰司の奥さん）

「…塩見さんは、11月祭の時に会いました。抜きんでて背が高かった事を憶えています。それから出所された時に白樺に見えられました。それが思い出です」

⑨村田能則（×年早稲田大学入学、元共産同神奈川県委員会）



「東京の3月4日の集会は約180名でした。東京の集会で特徴的なのは塩見さんに対する好き嫌いがはっきりした集会だったと言う事です。

塩見さんを嫌いな方は基本的に参加しない事を通告して実際そうされました。

最も塩見さんを嫌いなある大学グループ(中央大学、元ブント叛旗派)は参加しましたが、塩見、高原が当時如何いう事をやったかを暴露するビラを撒くと言うことで参加をする。

もう一つは塩見さんはマスコミに登場する事が多いので、雨宮処凛、鈴木邦男さん等が参加され、出獄後の方々が多かったです。

雨宮さんは塩見さんの事を、お師匠さんと呼んでいました。そう言う関係で何度か北朝鮮に連れて行かされたと言っていました。非常に好意的な関係を築いて居た方もおられると言う事があります。特に赤軍派等々の組織とは関係が無く、塩見さんと付き合った方は塩見さんの事をあまり悪くは言いません。

先ほど弁護士の友人の方が、立派な一生だと言われましたが、多分そうだと思います。

実際の議論をしたり、闘ったりした事を抜きにして言えば、「革命バカー代」として、「バカ」を貫いた男はいません。

東京の集会には奥さん(塩見一子)は来られませんでした。これは、ハッキリ政治的立場として参加しないと表明されました。具体的に言いますと、塩見は最後に地元清瀬市の市議員に立候補しました。

ところが選挙応援には、ブント、赤軍派の関係者は誰も行きませんでした。行ったのは、先ほど言いました出獄後の関係の方々です。塩見さんはハッスルして、世界同時革命、赤軍等の旗を作り選挙運動をやったのです。駅前の街頭宣伝では、獄中20年で頑張りました塩見ですと挨拶をしました。

最下位から二番目で落選しました。これは、家族とか多少とも政治活動をした人間からしたら堪らない事でした。だけど、雨宮処凛さん等は、充分楽しめたと思います。

やっぱり、私のお師匠さんだ、どこに行っても「バカー代」を貫いてくれる。政治運動等を抜きにすれば、人間的に魅力のある男だった事は間違いないと思います。

私はある意味では、塩見とは深い付き合いをした男ですから、欠点も良い所も十分承知しています。

塩見さんを、例えば「日本のレーニン」と呼んだのは藤本敏夫です。藤本はマスコミ対策も承知していた人間ですので、チャットと新聞記者の前で言ったのです。本人も半分その気になっていました。

それが少し怖い所ですが、先ほどの発言にあるように、彼は大きな誤り、失敗をしています。

私は、私の大事な第二次ブントを彼に潰されました。そういう面では大変恨みを持っています。

それから、私の可愛い同志たちを殺されたり、奪われたりしています。そういう意味では、彼を決して許す事が出来ない立場と言えます。だけど同時に、彼が「革命バカー代」を貫いた男だった事も知っています。

最後に私の感想を言えば、私は塩見さんの最後の3、4年間は本気だったと思います。先ほど言いました清瀬市の市議会選挙の件にせよ、それから心臓を患ってもタバコを平気で吸って、病院を三か所も追い出されています。

塩見さんは「日本のレーニン」でもありません。自分の抱えた責任の重さに耐えかねて逮捕された直後に自殺した森 恒夫と変わらない男だったと思っています。

彼はその事を承知の上で、最後はドンキホーテを演じたのでないかと思います。逆に言えば、言った事、やった事、彼が背負い切れない借金、謝るべき謝罪を残して逝ってしまいました。

その事を非難する事は結構ですが、此処に残った者は、高原君からの発言があると思いますが、我々は彼がやれなかった事をこれから総括し直し、彼が出来なかった謝罪をし、総括を一步でも深化させる立場が必要だと思います。

3. 4東京の集会でもその機運があり、本日の京都集会でも同じように機運が生まれ事を希望します。」

⑩高原浩之（62年京大入学、元共産同赤軍派）



塩見孝也お別れに思う

私は、第2次ブンドと赤軍派で、塩見孝也と政治行動を共にした。したがって、政治責任も共にする。こういう立場で思いを表明したい。

赤軍派の罪は大きい 後悔と贖罪

赤軍派は、70年闘争の飛躍的發展を期した。

これは間違いない。しかし、第1に7/6事件で第2次ブンドを崩壊させた。第2に連合赤軍事件を起こし人民闘争と革命運動に壊滅的損害をもたらした。

連合赤軍事件は、大菩薩峠で敗北した後も、人民に依拠せず、革命の原動力の点で根本的に誤った武装蜂起・革命戦争路線にしがみついた結果である。路線の破綻が革命運動を蝕んできた悪い「体質」を噴出させた。

事件は人民に依拠する路線に改めることを我々に迫った。この路線の自己批判と総括は終わっていると思う。しかし、連合赤軍事件はもっと悲惨である。「時代」とか「夢」とかの言葉で赤軍派の責任をあいまいにし美化するのは止めてほしい。

赤軍派の指導部は、路線の誤りが根本原因であると認めなくてはならない。第1に無念にも殺された同志に謝る。第2に不本意にも他人を殺して生き残る立場になった者にも謝る(同時に殺された者の遺族の感情に配慮した言動を要求する)。第3に傷ついた多くの赤軍派関係者の全てに謝る。この「会」はそういう場になるべきであり、そうしたい、と思う。私にとって赤軍派は後悔と贖罪である。

第2次ブンドが存在した意義 塩見が果たした役割

10/8羽田闘争 50年。新左翼は、ベトナム反戦・70年安保闘争において、三派全学連と全共闘および反戦青年委員会を通じて学生大衆および一部の青年労働者と結合し、社共・総評ブロックより少数ではあったが、闘争の先頭に立って全体を主導した。

第2次ブンドは、連合性を克服できず崩壊したが、新左翼と70年闘争の中で有力な役割を果たしたし、塩見はその第2次ブンドの中心的指導者の一人であった。

70年闘争は21世紀の今日でも大きな意義がある。日本帝国主義を打倒するプロレタリア階級独裁・社会主義革命という路線が、新左翼の代名詞とも言える「実力闘争」で大衆を捉えた。直接民主主義。

この「体質」思想は、現在的には「自己決定権」として2015年の反安保法闘争を頂点とする今日の人民闘争に定着していると思う。コンミュン・ソヴィエトに通じると思う。また、70年闘争は「68年革命」と言われた世界的な闘争の一環であったが、ベトナムと中国、民族解放闘争と文化大革命への共感と支持と連帯が大きな力となった。アジアとの連帯、この「体質」思想も今日の日本の人民闘争に定着していると思う。

塩見の「過渡期世界論」は第2次ブンドの代表的な指導理論の一つであった。

帝国主義と社会主義革命の時代。「3ブロック階級闘争の結合」。アジアの民族解放・社会主義革命がロシア革命後の世界革命の中心であり発展である。日本の社会主義革命はそれと結合する。情勢は変わったが、この理論も、歴史認識の基本として今日に受け継がれていると思う。

現在と将来のために 我々の世代の責務

今日、人民闘争が発展する情勢であるが、その人民闘争の数多くの具体的な課題の一つ一つに、新左

翼が良い「体質」・思想を堅持し、悪い「体質」・思想を清算して、人民大衆と結合する、「偉大な」と言うべき努力が存在していると思う。

民族・女性・部落など差別の問題や労働者階級「下層」の問題が大きかったと思う。この偉大な努力こそが、70年闘争を今日の人民闘争につなぎ、活かしていると思う。「人民民主主義」「革命的民主主義」、言わば全共闘運動の全社会化と全人民化が展望される。

また、アジアとの連帯、日本と韓国・朝鮮と中国など東アジアの人民と革命の結合、これも、帝国主義・覇権主義に反対し、国家主権・民族独立と「自己決定権」を守り支持する闘争で引き続き強まると思う

ロシア革命100年。ソ連崩壊はいい。中国の文化大革命の破綻とその後の変質、ベトナムの民族解放闘争勝利後の変質、朝鮮の現実は深刻である。しかし、これも我々の時代である。

この時代を、マルクス・レーニン主義も対象として総括し、社会主義・共産主義を再構築する、その方向へ一歩でも進むのが我々の世代が最後になすべき責務だと思う。

人民闘争の発展には、70年闘争の正反の経験からも、革命党派の共同と統一が必要だと思う。

新左翼と言われた我々の世代は失敗し、党派的に崩壊した。「内ゲバ」「リンチ」は最悪の「体質」・思想であった。新しい世代はこの教訓を生かし、ぜひ成功してほしい。

①小山陽造（69年京都産業大学入学、共産同統一委員会）

「私は、共産主義者同盟統一委員会に所属しています。統一委員会とは、第二次ブントの形成過程で生まれた組織名称ですがそれを引き継いで闘っています。

2004年に結成いたしました。当時の戦旗派と通称烽火派（全国委員会）という二つの組織が統合して一つの組織を結成しました。当時まで、ブント分派の統合と言う話は無かったのですが、2000年代の初めに新しい党派政治の動きを作って行こうと言う事を掲げて結成しました。綱領の前文では、ブントの継承を掲げ、ブント分派も幾つかあり現在も活動をされており、闘っておられる方々と共同の闘いを重視しながら、現在活動をしています。

結成後10数年を経ましたが、それほど大きな成果は残念ながら達成していません。

何らかの原因もあるだろうと、総括もしてリニューアルし、脱皮をして行かなければならないと考えています。

本日は、塩見さんの事を語るという事で、簡単に触れさせていただきます。

私は、個人的にほとんど塩見さんとは関係がありません。塩見さんが、関西に来られた時に何度かお会いし、話した事がありました。先ほどから紹介されている、特に晩年の活動については非常に興味を持って眺めておりました。

塩見さんの業績の一つは、過渡期世界論にあると思います。

私たちも、現在三ブロックテーゼに則っています。簡単に言えば現代世界は社会主義に向かう過渡期にあり、その過渡期を切り開いて行く主体的勢力として、三つの勢力、一つは帝国主義下の階級闘争、「労働者国家」の階級闘争、それから植民地・従属国の階級闘争、この三つを結合させて新しい世界革命の時代を切り開いて行くのだと言う考え方です。

先ほど高原さんの話のもあったように、基本的には正しいと思っております。機関紙「戦旗」を発行していますが、最上段には、このスローガンを現在も掲げています。そういう業績、成果は塩見さんに確かにあるのですが、しかし他方ではブントの党建設に対しては、極めて破壊的な影響を及ぼしたと率直に思っております。ただ、今から思えばその責任は塩見さん一人にあったのではなく、又少し広く考えても赤軍派の人たちにあつたのでもなく、当時私たちが持っていたリーダー論、組織論が生み出した一つの問題ではなかったかと思えます。

ブントは、階級闘争の先頭に立って闘い続けた、これは基本的に皆が認める所です。

反面、組織建設では大きく失敗しました。68年頃から始まった党内闘争で四分五裂の状況を招きました。

当時私はまだ活動をしていませんでしたが、その後小さな分派、12・18ブントに所属していましたが、その分派も十数の分派に分裂しました。ブント分派は細かく計算すれば、二十数分派にもなったと思います。

これは、党建設の敗北だったと思います。党内闘争をどういうふうに位置づけて行っていくのか？という事に大きな問題があったのだらうと思います。内容的には戦術を巡っての論争が多かった。

つまり軍事闘争をどう展開して行くかが多かった。それから形態的には、論争が直ちに暴力闘争に転換して行く事を、誰も止められなかった。むしろそれは、正義だと言うことで容認されて来た事があったと思います。

そこの所を、如何乗り越えて行くのかと、現在私たちは活動をしています。

端的に言えば、共産主義運動は敗北してはならず、理念も破産している訳では無いと思っております。

共産主義運動の理念、強いて言えば一人ひとりの人間の生き方にも繋がって行くと思いますが、

これをもう一度、階級闘争の先端に押し上げて行くのかどうか、現在私たちに問われています。

現在、国会前に私たちの友人、同志たち、広い意味で仲間達が押し掛けて「アベやめろ！「麻生やめろ！」と言う声が高まっています。

2015年に戦争法反対の同様な闘いが高まりました。今回は、政権打倒を直接掲げた闘いが大きくうねっています。その中心には、広い意味での左派、リベラル派が中心を占めています。一つの全人民的な広がりを創っています。

これは、世界的状況の日本的現れと思っております。いわゆるサンダース、コービンと言う人たちがここ数年、世界の中で左派が登場している動きを示してくれました。

日本の状況も、これらの動きとは無関係、例外では無いと思っております。これらの人たちと結びつきながら、今後も労働者、人民の中で粘り強く活動をして行きたいと思っております。ただし、その前提になるのは弾圧との闘争です。2020年のオリンピック開催を頂点にしながら、戦前とは違う形で、反体制組織、勢力を潰して行こうという動きが強まって行きます。これに打ち勝ちながら、皆さんと共に闘って行きたいと思っております。」

⑫橋本利昭（62年京大入学、革共同再建協議会）

「実践的な事に絞って簡潔に言います。

塩見さんの追悼と言う事で真摯な自己批判、総括が何人かの方からなされました。私は赤軍派、ブントとも関係が無い道を歩んできました。

塩見さんは、同年に京大に入学した同期です。森恒夫さんは高校時代の一年後輩でした。森さんは剣道部の右翼青年のような人でしたが、その後の歩みを見た場合、70年安保闘争における武装闘争や非公然、非合法活動についてどのような総括をするのか。

当時の我々全体の、いわゆる新左翼と言われる部分の世界認識や革命戦略と言うのは、世界的に見ても圧倒的に正しかったし、そういう水準にあったと思います。例えば、先ほどから言われている過渡期世界論とか攻撃型階級闘争と言うのはブントの理論ですが、我々が言っていたのは、段階・過渡・変容・再編・危機と言う世界認識。安保粉碎・日帝打倒という戦略。そういうものが持つ意義は今日でもハッキリしていると思います。

それに比して、党の組織論とか武装闘争、非公然・非合法活動と言う点では、我々は初歩的段階にあって、入口の段階で重大な誤りを幾つか犯して、敗北しています、にも関わらず、それを無視したり清算したりするのでは無く、何を継承して何を否定して乗り越えるかが、今問われていると思います。

我々的に言えば、1972年1月1日に「前進」564号「勝利の七二年を武装進撃せよ～人民革命軍・武装

遊撃隊を建設せよ」(本多延嘉)と言うアピールがありました。それは、今後の階級闘争について一種の展望を示したものでしたが、半世紀後に考えて見ると、アジテーション的に受け取られていました。

我々内部にもその傾向があったと今日反省しています。

武装闘争、非公然・非合法活動と言う時、本当に悔しいし、申し訳が無い事がいっぱいあります。ほとんど公開されておらず、我々全体が避けている問題として、1975年9月4日の「横須賀緑荘誤爆事件」がありました。爆弾の製造過程で誤爆して5人が亡くなった事件です。同志もですが、住民、市民の方を巻き添えして亡くなった事があります。この事について、総括を徹底的に隠して、避けると言う態度で我々がやって来たところに重大な問題があると思います。

そう言う事も含めて、70年代に我々が何を切り開こうとしたのかを、今日の世界の中でもう一度捉え返して行く必要があると思います。例えば、ヨーロッパのレジスタンスと比べても、我々は初歩的な水準で敗北している。その事を真摯に捉えなければならないと思います。

その上で結論的に言いますと、実践的に問われている今日の改憲攻撃、朝鮮戦争危機にどう立ち向かうかと言うところに話を持って行かないとダメだと思います。

組織総括や切開が行われたとしても、この点を抜きにした総括はあり得ないと思います。

朝鮮侵略戦争の場合、我々が掲げて来た国際主義とか高原さんが言われた自己決定権が問われると思います。

ブルジョア的評論はそうですが、多くの左翼と言われる人達の中でも、アメリカの核兵器と朝鮮人民共和国の核兵器のどちらを支持するのか言う次元にいつてしまう。これは絶対に違うと思います。

朝鮮民族、在日朝鮮人民も含めた南北朝鮮人民の分断の打破、革命的統一と言う流れを誰も押しとどめる事は出来ない。トランプや安倍が介入して破壊しようとしているが、この南北朝鮮人民の分断の打破、革命的統一の運動を支持する事を、我々は基礎にしなければならない。

その上で現実の安倍政権がやっている事は、グラグラですが最後まで朝鮮への圧力、制裁であり、今出ている敵基地先制攻撃論です。

こう言う事、攻撃に対して、日本の人民として特に沖縄の新基地建設を許さない闘いを軸にして徹底的に闘う必要があると思います。

そういう立場を捨象して、評論的にアメリカと北朝鮮の核兵器のどちらを支持するのかと言う次元に陥れてはならないと思います。これは、我々が70年代に掲げた闘いをもう一度大きく発展させる鍵であると思います」

⑬中島慎介(63年同志社大学入学、元共産同)

「蒲池裕治、藤本敏夫と同期です。

私は一貫として一兵卒として参加して、裏方の事はだいたいやって来ました。

私が辞めてからも様々ありましたが、一番大きな原因は7・6だと思っています。

7・6の事は、当時の赤軍派が寝込みを襲ってやったと言う事になっております。

でもそれも真実ではありません。当時私はブント神奈川県委員会、川崎地区反戦をおこなっていました。7月5日の午後呼ばれて、医科歯科大学に行きました、そのうちに関西から学生が多く来たりして、その中で私に与えられた任務と言うのは、明治学院大学の和泉校舎を知っているかと聞かれて、全く知りませんでした。夕方、堂山道生(62年同大入学)さんに連れていかれ、明大の和泉校舎がどこに在るのかを確認しました。その時に、旭凡太郎(60年大阪市大入学)さんが近辺の駅から出て来た時、堂山さんが二、三発殴ってしまった。

なぜそうなったかと言うと、前段階の4・28闘争でブントが秋葉原駅にゲバ棒を用意して、さらに新橋に走

るとなりました。しかし、東京のブントでは秋葉原駅にゲバ棒を集める事が出来ないと言われてまして、その会議で、旭凡太郎、佐藤秋雄、浦野正彦さん等、又は東京のブントの方と会いました。先ほどの一件で、旭さんが堂山さんに殴られる事は、どう言う事なのか・・・と考えました。

私は、関西ブントとして上京して、横浜に行き、地区反戦づくりを行い、手ごたえは感じていた頃でした、私たちは、関西ブントから梯子を外されたのかと不安を持ちながら、医科歯科大学に帰りました。

夜、多くの者が集まってくる中で、塩見孝也、田宮高磨(62年大阪市大入学)、上野勝輝(63年京大入学)、堂山さんがいて各々アジテーションをしていました。その内容と言うのは、後に分かりましたが、その時はさらぎ徳二さんがトップでしたので、さらぎ徳二の通達が出ており、翌日、ブントの会議があり、通達の中に我々がリンチされると言う事が細かく出ていると言う報告がありました。

では如何するのか？出た結論は、我々が先に中に入り、内側からバリケードをして頑張れば、関西ブントが仲裁に入るから、あるいは権力機動隊の介入で流会になると、流会を狙って皆で行こうとなりました。我々活動家、地区反戦の労働者、高校生、浪人生を全部ひきつけて会議場に立て籠もりに行く事になったのです。ところが、立て籠もりに行くと言っても、どこをどう行くかが分からない。

私がたった一か所の進入路を見つけました。

レンタカーを借りていたので、隣のお寺から一人ずつ進入路から入りました。

最後に私も学生会館に入りました。その時、同志社大メンバーが出て来て、さらぎ徳二さんが居ると聞きました。

その後、田宮さんがさらぎさんに「自己批判をしろ」と迫り、さらぎさんは、何の事だと反論がありました。反論の過程で、田宮君がさらぎ徳二さんを二、三発殴る、その後が上野君でした。最後に塩見さんが出て来て、これで納めてくれるだろう思っていたら、塩見さんまで殴りに掛かりました。その時は、地区反戦の数カ月前に参加した女性労働者、高校生も泣き始めました。

これで僕は、何のために上京して地区反戦の活動をしているのか？と思っている所に、重信房子(65年明治学院大学2部入学)さんが出て来て、「これは止められないから、薬を買って来てくれ」

30分ぐらいで薬を買ってきたら、重信さんが正門の前で待っていて、「もう遅い」と言われました。

そして「機動隊が入って、さらぎさんが逮捕された」と言いました。

必死にさらぎ徳二さんを担いで助けたのは、同志社大学等の関西の学生メンバーでした。

タクシーを探したが無く、機動隊が迫る中で、さらぎ徳二さんは「もういい、私は逮捕状が出ているが、君たちまで逮捕される事は無い。私をほっとけ」と言ったとの事です。その後、重信さんが用意したタクシーに乗って関西の学生メンバーは逃げる事が出来たとの事です。

最近ですが私は、さらぎさんは組織のトップとしては素晴らしい人だと思います。

昨年、塩見さん、高原さんとも会いましたが、その時にも組織のトップとしては私はさらぎ徳二さんの方が優秀だと言いました。塩見さんには、「悪いけれども、あなたはトップ・リーダーとしての資格は無いと思う」と言いました。

その後の映画、書籍でも寝込みを襲った云々となっていますが、そうでは無い事を当事者でもある佐藤秋雄さんとも数回お会いしてお聞きしました。当時、さらぎ徳二さんは、非公然にあつて、実際活動が出来なく、ブントのトップ・リーダーは渥美文夫さんであった。佐藤さんからは、当時、労働者から学習会の要請があつて、5日夜に学習会をし、当日は泊まった。翌日、来たのが私たちのグループであった。ですから、さらぎ、佐藤さん達も何も分からなかったし、私たちもまさか、さらぎ徳二さん達がいるとも思っていなかったと言えます。

ただし、私たちは、いずれ襲われ、リンチを受けると言う悲壮感で入ったし、当時、ブント中央＝さらぎさん

と言うことで一致していたので、「窮鼠猫を噛む」と言う形で事は始まったと思います。

そこに居た、メンバー、学生、労働者の「暴力」を止める事が出来なかった。その時、トップ・リーダーは事情を聞いて、「暴力」を止めなければならない。ただ、「止める事」が出来なかった事が、その後も続いたと思います。

特に問題であったのは、69年3月に上京し6月まで革共同中核派等との労働者の地区反戦集会が三度ありました。最小はブント系は合わせて200人ぐらいでした。6月の集会ではブント系で500～600人となっていました。その三分の二は京大、大阪市大、同志社大が中心になって結成していた労働者の地区反戦のグループでした。

私は本当に手ごたえを感じていました。当時日本共産党に「お前たちのプロレタリアートはどこにおるか？」と言われて、だからこそ、自前の労働者組織を作りたかった。せめて、中核派の三分の二ぐらいの労働者を集めたかったと言う思いでやっていました。本当のブント、労働者組織のトップならば、私たちが労働者の地区反戦で頑張っていたのがものすごく成果を挙げている事を見た上で、7月2日の私たちをランチにかけると言う通達を出す事は、言語道断と思う。それがスタートだったと思います。

その後、上野さんを伴ない佐藤秋雄さんに謝罪をし、昨年には、高原さんも佐藤さんに謝罪と和解をしました。当時その後、私は、7・6の時にブントをやめました。」

⑭佐々木純一（74年早稲田大学入学、元赤軍派ML主義派、釜日労書記長）

「…多分、ここに集まれた方々の中では一番歳が下だと思います。

74年大学入学ですので、皆さんより10年ぐらい下の世代になります。

最初に入った組織が、共産同赤軍派マルクス・レーニン主義でした。

高原さんの獄中からの綱領草案がでて、第三次ブントの建設と社共に変わる革命的労働者党の建設と言う事で、始めました。

入った時から、下部メンバーでしたので、今日初めて、高原さんと直接話が出来まして、久しぶりにお話を聞くことが出来ました。

当時、紅旗派、遊撃派、国際主義派等との四派の統合と言う事で、綱領論争を行いながら、当然ながら赤軍派、ブントの総括、そして新左翼の総括も行いました。その後、紆余曲折がありましたが、紅旗派、怒涛派のメンバーとは、現在労働者共産党という事で、一緒にやっています。

先ほどから話を聞いていて、赤軍派の総括が多々話されていますが、私自身は、70年代に赤軍派の総括は決着がついています。今必要なのは、それ以降の21世紀を迎えて、新たな時代にどう言う路線、どう言う党建設を進めて行くのかと言う事だと思います。そう言う議論にぜひ皆さんが積極的に踏み出して欲しいと思っています。

私自身、新たな時代の路線、党建設を出せるものには無いですが、現在釜ヶ崎で下層・非正規の仲間たちと活動を行っています。東京の集会にも松平さんが誘われましたが、今更塩見さんでも無いだろうと思いました。塩見さんは、数年前に生前葬をしたのに、葬式をなぜするのかと行きませんでした。

塩見さんとは、赤軍派ML主義の経過もあって、話もしたことはありません。

出獄後も会う事も無く、ただし、私たちも赤軍派、連合赤軍、ブントの総括、そして一向過渡期世界論を批判的に越えなければならないとやって来て、しかしあまり上手く行っていない。先ほど、統一委員会の方も言われましたが、実際上手く行っていない事は事実です。

新左翼の存在が、反政府闘争の中でもどんどん少なくなっていく。そうした中でも、一人一人が、総括で苦悩して生きて行くよりも、もう少し健康的に、大らかに議論して行く事が必要だと思います。

経緯、総括は別として、大きな一致で大きな階級闘争を前進を目指して行ければ良いと思います。

今回の集会も、その取り組みの一環として行われれば良いと思いますので、ぜひこの機会を広げて行って欲しいと思います。」

⑮ 泊 寛二 (元西南地区反戦、全港湾関西地方委員会委員長)

「・・私は、7・6 事件で言うと、当時弁天町あたりに西南地区反戦と言うのがありました。その時に中心的にやっていたのは、宮本(ブント西地区委員会)さんと言う京大卒で労働金庫で働いて、西南地区の労働運動リーダーだったのです。

私は、当時学生運動、社学同は全く分から無いし、知らないのです。幸いなのか？は分かりませんが。高校の時の友人で福田隆之(ブント南地区委員会キャップ、西南地区反戦結成、大菩薩逮捕)君と言うのがいました。後に赤軍派に行くのですが、彼が弁天町近辺で大学を辞めて労働運動をやるんだと言うのです。泊も一緒に行こうと言いました。彼は、労働者が居ると言う事と、風呂が12時までやっていると言うのです。その一言に感銘して労働運動に入ったと思います。

69年1月から労働運動をやり出していました。7・6の時は、福田君等、学生運動出身メンバーは皆赤軍派に行ったのです。当時では、穂積亮次、若宮正則さん等です。私は労働運動をしたいと思い。又古いタイプ人間ですので、やっぱり議長を殴ってはあかんと思いました。もう一つは、当時さらぎ徳二さんの『先行性ファシズム』(69年)というパンフレットがあって、それだけは私は良く理解できた。

機関紙「戦旗」は、高寺良一さん(1967年「10.21闘争総括をめぐる諸問題」『烽火』NO3)から渡され自分が書いた文書があるので読めとも言われました。しかし、ほとんど「戦旗」は、意味が分からない文書でした。

以上の二点で私は、大阪に残りました。

7・6の後、赤軍派との対立になりまして、謄写版(トウシャパン)の取り合いにもなりました。地区反戦ではこのような対立、論争でした。その後私は、労働運動を一貫してやって来た訳です。

塩見さんの関係で言うと、柴田泰弘(よど号HJ、2011年死去)さん救援活動に少し関わっていました。その活動の中で塩見さんと話す機会がありました。印象に残っている事は二つあります。

地下鉄のキップの買い方、乗り方が分からんと言う事。自慢していたのは、息子さんがミスター・チルドレンのメンバーと知りあいで、自分の事がミスター・チルドレンの歌の歌詞になっているとの事です。

最後に思うのは、東京集会の発言で、塩見さんは学生運動の革命家とありましたが、そうかなと思いますし、晩年は労働運動をやっていたと言う事で、後30年ぐらい労働運動をやっていれば、労働運動の立場から言えば、中味のある革命家になったのではないかとも思います。」

⑯ 丸岡ノリコ・・(日本赤軍・丸岡修の妹)

「・・私は家族と言う立場で、お話をさせていただきます。

私は直接塩見さんとは面識がありません。兄の手紙の中に塩見さんの名前が何度も出て来た事を憶えています。私の兄は、1972年4月13日、22歳の時に日本を発ちました。その時私は高校一年生でした。あこがれの高校に入学出来て。意気揚々と通学をしていました。13日の朝、突然「ノリちゃん、これあげるは・・」と、分厚い英和、和英辞典を貰いました。それが最後のプレゼントでした。何故かと言いますと「これからヨーロッパに行く」と。

5月30日にリッダ闘争がありました。兄貴は大丈夫かと思い、関係は無いだらうと思いました。

数日後、第四の男と言う事で新聞にデカデカと写真が載りました。

その前に、公安警察、新聞社等が、家の前に30人ぐらい来ていました。

何が起こったのか、良く分からなかったですが、家宅捜査も受けて家の中はめちゃくちゃになりました。

その後、73年ドバイでハイジャック、77年にダッカのハイジャックが起こりました。

77年ダッカのハイジャックは、NHKのドキュメントで放送され、その時の兄の声が唯一の消息でした。88年帰国後逮捕され、裁判闘争を続けながら、2011年5月19日に亡くなりました。そんな兄の思いは、人間が人間らしく生きれる社会を創ると言うのが、彼の思いでした。私は、この事を胸に秘めて、私の立場から今も、生きています。」

①山中幸男（68年東京都立大学入学、救援連絡センター事務局長）

「・・・私は、獄中闘争についてはあまり関わっていませんでした。



塩見さんが1982年出獄された時、刑務所に迎えに行きました。その時一緒に行ったのが高沢皓司（×年関東学院大学入学）さんという方です。91年1月に田宮高麿さんから来てくれと要請があつて、高沢さんも行きました。

その時、田宮・塩見さんの国際電話での話し合いが初めて実現しました。高沢さんは一部では結構知られていたライターなのですが、よど号グループに関与してからは一挙に名を知られました。

その後95年に田宮さんが亡くなり、99年『宿命』という本で、講談社ノンフィクション賞を取る事になりました。

今日は、赤軍派等の70年代の総括がメインとなっていますが、こう言う話は、40年、50数年たってレジェンドとするのも良いですが、私は今でも救援と言う分野ですが現役プレイヤーとして、気持ちを一つして頑張っていきたいと思ひます。

とカッコ良く言いたいのですが、皆さん歳を取りすぎています。これはどうしようもありません。ただ、国会周辺の反安倍集会に参加されている60年、70年代の方には違和感があると思ひます。

警備に従い、安倍を倒せというラップ風のコールです。我々の頃のシュプレヒコールとは違ひます。

でも、ぜひ老骨にムチを打って参加して欲しいと思ひます。ただ、昔の実力闘争云々は、全く今の情勢では通用なくなっています。その雰囲気を感じたいのなら、ぜひ沖縄の辺野古新基地反対闘争に参加して頂きたいと思ひます。

今日、革共同再建協議会の話聞いて、感激しました。東京の革共同は少し違ひます。これ以上言う差しさがありますが、関西は決して悪い所では無いと、救援連絡センターの立場からも言わせて頂きます。ぜひ皆さん、現役プレイヤーを目指して死ぬまで頑張ってください」

②植垣康博（68年弘前大学入学、元共産同赤軍派）

「・・・率直に言ひますと、塩見とは20年、30年と論争をして来ました。



私にとっては、塩見は連合赤軍等の総括を巡って最高の敵手でした。

色んなエピソードがありますが、私が良く思い出すエピソードとして藤本敏夫が亡くなり追悼会の時、ブント系だけの三次会がありました。そこで自己紹介も兼ねて各人の思い等が語られました。

私が自己紹介する時に、こういう言い方をしました。当時の様々な理論、軍事論等々立派なものでも、

実際に行動に参加しないと分からないと、72年のゲリラ戦に参加しました。

こういう発言をしたところ、塩見孝也から「植垣、人を殺す事はそういう事なのか！」と言われました。

その時私は「人を殺して始めて分かる世界がある」と答えました。その後はグチャグチャになりました。

僕が言ひたいのは、実際「人を殺して始めて分かる」と言う意味は、居直りでは無いです。

僕は、塩見から居直りの反革命分子とレッテルまで張られましたが、僕が言ひたいのは、その事によって、

当時赤軍派だけではなく、日本の左翼運動全体が試されたのではないか、連合赤軍問題はその凝縮した事であったと思います。僕は、それを総括の基盤に据えました。

日本の左翼運動を総括していけば、例えば日本共産党の宮本顕治のスパイ査問問題があります。まさに連合赤軍問題であります。ただ、スパイ査問問題は一人しか亡くなっていないので、それほど重要視されなかった。そこから辿るとロシア革命の問題に行き着きます。

日本の左翼は、ロシア革命によってコミンテルンが結成され、その支部として日本共産党が出来た時に、ソ連共産党の作風、組織構造が全て移植されてきた。それが日本の左翼運動で、いわば始まりみたいなものです。

ロシア革命に伴っていた、仲間を殺す世界が日本にも移って来た。日本共産党以降の様々な左翼運動の中にも脈々と続いてきた。その帰結が連合赤軍になりました。

又、同じ遺族でも、山崎順(69年早稲田大学入学)さんの父さんに「下手な反省だけはしてくれるな、頭を下げるだけでは、自分たちの息子、娘が何の為に殺されたか分からなくなる」と言われました。

そう言われた時、私は承知しましたと言いました。その後、それが反革命の居直り分子のレツテルにもなりました。

僕自身の自己批判は、当時の実際行動としてやった事を掘り下げて、事実、実際の事は如何だったかの総括を進めて来ました。それが、亡くなった人たちに対する唯一の反省の取り方では無いかと私は思います。」

⑨前田裕悟(53年同志社大学入学、元電通労働運動研究会、元共産同)

義理堅く、約束を守る「塩見孝也」(メッセージ)



「平和市民」を立上げ、参院選全国区を闘った際。

築地の近辺にあった選挙事務所に、塩見は本部役員として特に「成島忠夫(故人・静大グループ)」を受け持ち、毎日出てきて、打合せ後、各地や都内に選挙演説のため彼は出ていったが、静岡の時もあれば勿論・都内もあった。

東中野駅前や、吉祥寺駅前の時は私も同行したが彼は演説に入るや、先ず自己紹介をしてから入るのだが通行人は立ち止まらない、100M周辺に、いつも20人位の連中のみが、演説を聞いていた。それは「公安」だった。

清瀬市田布施で駐輪場の係となり、初めて彼が手にした労働対価、ちょっとした経緯で、市会議員に立候補したが、勿論、下も下の得票だったが、成島忠夫は、カンパを持参し応援に入った。

義理堅く、底抜けの人間信頼観は、両宮処凛女史の追悼文に 余さず語られている。

そんな人間性を持った塩見孝也と言えよう。